

東日本大震災の被災者の生活を支援するあなたのための情報紙です。



大人と赤ちゃん、おだやかな雰囲気の中でふれあう（ベビースマイル石巻）

特集 子育てママと地域を創る

- 屋外で子どもを元気に育てる! ③
お外育見の会 あおぞら（宮城県仙台市）
- 母親と地域がつながり、まちづくりへ ⑤
特定非営利活動法人ベビースマイル石巻（宮城県石巻市）
- 乳幼児から高齢者まで誰でも参加できるサロン ⑦
ほうきだ 方木田たすけあいの会・ふらーっと茶の間（福島県福島市）

☆S(支え合い)-1グランプリ 第3回いがす大賞 結果報告 ⑧

場の力⑨

おらほの家（宮城県石巻市）

若い世代と地域住民を結ぶ ためり場づくり⑩

若者活動サポートセンターあおぞら（広島県広島市）

まじわる災害公営住宅⑫

あすと長町復興公営住宅（宮城県仙台市太白区）

インタビュー あの人に会いたい⑬

おれんじドア 代表 丹野智文さん（宮城県仙台市）

インタビュー あの人に会いたい⑭

防災士 佐藤美嶺さん（宮城県仙台市）

宮城県サポートセンター支援事務所からのお知らせ⑮

東北の元気⑯

ままりば（岩手県大槌町）

特集

子育てママと

地域を創る



命を生み、育てる尊さ。

赤ちゃんは、たいせつな地域の宝。誰もがにっこり癒される存在です。

育てるお母さんは、誰もが新米。

1児の母も、2児の母も、3児の母も子育てに試行錯誤しています。

お母さんが一人で頑張る子育ては辛いけれど、子育て中の仲間や

地域の人たちと一緒に

みんなで子育てができたら最高！

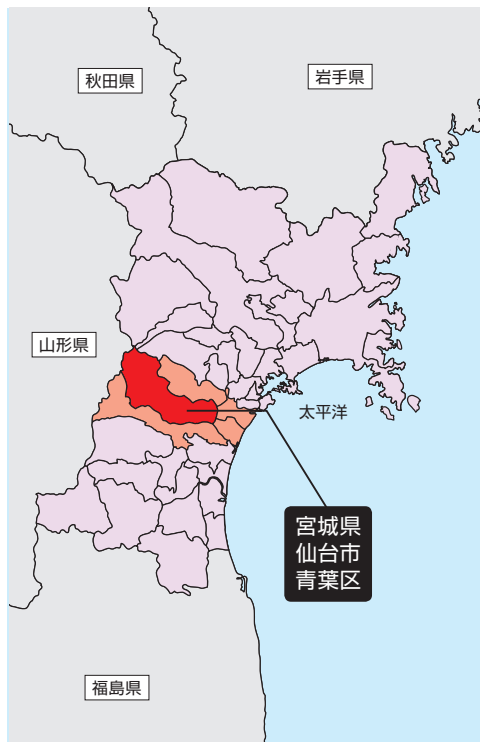
お母さんが笑えば、赤ちゃんも笑顔。

お母さんが笑えば、地域も元気。

子どもを介して、地域がつながる。

そんな取り組みをご紹介します。





スコップとほうきで雪道を切り拓く!

屋外で子どもを元気に育てる! みんなで子育て

◎お外育児の会 あおぞら(宮城県仙台市青葉区)

ポイント

- メンバーと信頼関係を築くことが、子育ての孤独感を減らし、「みんなで子育て」する環境づくりに。
- 子どもも大人も、屋外で五感をつかって遊ぶことが大きな学びに。

屋外で自由に遊ぶ未就学児

「お外育児の会あおぞら」は、震災直後の2011年5月に発足した。メンバーの多くは、子どもが外で自由に遊ぶ環境づくりを行う「西公園プレーパーク」の参加者たちだ。「プレーパーク」

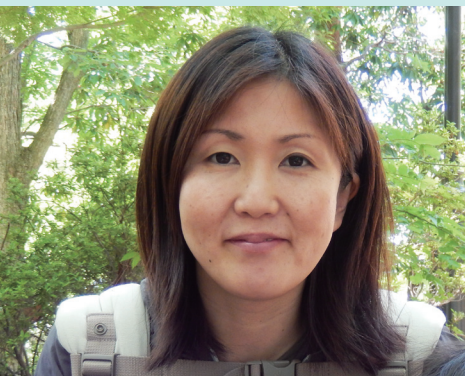
杜の都仙台の街中にある西公園は、桜の名所として知られ、傍らには広瀬川が流れる自然豊かな環境だ。ここを主拠点に、0歳から就学前の子どもとその親7組が週1〜2回集い、外遊びを楽しんでいるのが「お外育児の会あおぞら」だ。季節の移ろいのなかで、子どもたちは桜の花びらや松ぼっくり、落ち葉を拾い集める。裸足になるのも気持ちいい。冬になれば雪遊び。お昼になれば、母親たちが火を起こして、お餅を焼いたり、うどんをつくったり。その傍らで、うちわを持って炎起こしに協力する子どもたちの目がキラキラ輝く。調理したばかりの具だくさんのうどんを、屋外でみんなで頬張る楽しさが、寒さをも吹き飛ばす。

「お外育児の会あおぞら」は、震災直後の2011年5月に発足した。メンバーの多くは、子どもが外で自由に遊ぶ環境づくりを行う「西公園プレーパーク」の参加者たちだ。「プレーパーク」

はいつでも誰でも参加ができるという利点がある。子連れでの避難生活で苦労を経験した母親たちの間で、「特定の仲間と信頼関係を築きながら、安心して子どもが育つ場を」という思いが生まれた。身を寄せた避難所で、同じ思いをもつ母親に声をかけ合い、試しに一度西公園に集まってみようということになった。

被災後の重いムードのなか、子どもたちは西公園を駆け回り、室内では見せない生き生きとした表情を見せた。避難生活を送った母親たちも、開放感を感じる屋外で、子育て中の仲間と集えることに安堵し、また心強くなったという。集まった母親たちで話し合い、正式に会を立ち上げることに。現在に至る。

あおぞらでは、「外で五感をつかって遊ぶこと」をたいせつにしている。プログラムはなく、子どもたちは自由な発想で遊ぶことができる。バケツに一心に雪を集める女の子。つくった雪だるまを、落ち葉で装飾する男の子。活動的な年齢年中チームは、スコップや鍬を持ち出して、



お外育児の会 あおぞら 寺牛 替子さん

「子どもたちとナナメの関係をつくっていききたい」

雪だるまをつくったかと思えば、すぐに壊して「お風呂にしよう」と中をくり抜く。公園から歩道までの雪をかいて、即席の道をつくるなど、その時々思いつきで遊びが目まぐるしく変化していく。

最初はおっかなびっくり触っていた鍬など道具の扱い方も、いまでは上手。地面にガラスの破片が落ちていたら、子どもが自分で拾い、危ないものを入れる缶へ捨てる。母親たちが火を起こし始めれば、うちわで風を送る子どもたちの姿も。危険なものを最初から遠ざけるのではなく、子ども自身が実際に触れ、何が危険なのかを主体的に学ぶ場でもある。室内では経験できない環境が、ここにはある。

メンバー全員で

「子どもを育てる」

あおぞらには、代表者がいない。メンバー全員が子育ての中で、「二人ではなく、みんな考えて子育てをする会にしよう」と考えるからだ。3人の世話人と、1人の会計係が半年交代で、日程調整や備品の購入、お金



暖をとりながら、野菜たっぷりの煮込みうどんを調理

の管理などをしている。会費は1世帯あたり月2000円。そのほか、うどんをつくったときの材料費などは別途実費を徴収する。

代表者がいないため、メンバー全員が話し合いに積極的にかかわり、信頼関係が築きやすくなるという。固定したメンバーゆえに、子育てへの思いを共有することができる。そうすると、他人の子どもを躊躇することなく「叱る」こともできる関係になる。そんな親同士の姿を見て、子どもも親以外の大人と安心して一緒に遊ぶようになった。「少しこの場を離れるから、子どもを見ていてほしい」ということも気軽に頼み合える仲になり、

母親がそばにいないとぐずりてしまった子どもも、いまでは母親がいなくても、信頼できる大人がそばにいれば、やりたい遊びに夢中になれるようになった。メンバーの一人、寺牛替子さんは、「子どもたちと、先生や親とは違うナナメの関係をつくっていききたい」と話す。

活動から5年を迎え、新たに第2子、第3子を迎え、新たに参加するメンバーも多い。「3人の子どもを育てているメンバーから話を聞いて、兄弟が多いのもいいなと憧れてしまつて」という声からは、あおぞらが単なる子育ての情報交換の場や遊び仲間を飛び越えた、「みんな子育てができる安心感」を提供していると感じた。

外で子育てができる幸せ

昨年この活動から、外で自主保育を行う「てづくりようちえん」が誕生した。現在、年少1人、年中2人の園児3人が、輪番で担当するお母さんやスタッフとともに平日を過ごす。子どもたちの発想や想像をたいせつにし、子どもたちがその世

界に浸って飽きるまで寄り添う。西公園の飲み水の水道のそばで、動物園こっこで半日過ごしたことも。つき合う大人も根気がいるが、子どもが大人に邪魔されることなく集中して遊べる環境があることは、うらやましくもある。

あおぞらは、母親にとって一息つける場だ。子どもと1対1では遠出もしづらく、家にひきこもりがちになる。一人での子育ては、子どもから目を離すことができないが、あおぞらに来れば、みんな一緒に見守ることができる。子どもたちが自然豊かな環境でのびのびと遊ぶ傍らで、母親たちが手際よく火をつけ炭を移す姿は格好よかった。「お外で子育てできるって幸せです」と話してくれた母親の言葉が印象に残る。 **小**

DATA

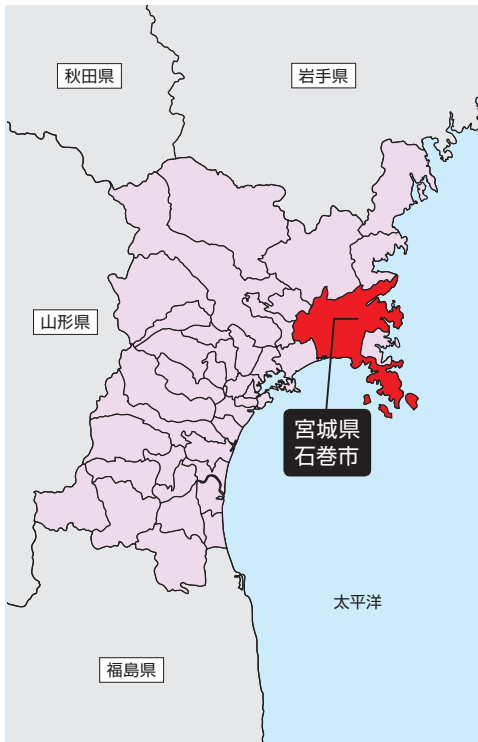
お外育児の会 あおぞら

活動場所&集合場所：西公園
プレーパーク

E-mail osoto-ikuji@yahoo.co.jp

問い合わせ：西公園プレー
パーク

TEL 090-7562-6154



大人同士で情報交換をしながら、子どもともしっかりふれあう

母親と地域がつながり、まちづくりへ

◎ 特定非営利活動法人ベビースマイル石巻 (宮城県石巻市)

ポイント

- 常設拠点に母親たちがリラックスして集い、つながる場になっている。
- 子育て世代だけでなく、地域を巻き込んで「こんなまちにしたい」を叶える！

2015年4月、宮城県石巻市蛇田地区にある2階建ての建物に、「マタニティ・子育てひろばスマイル」が開設された。平日の10時から15時まで開いている子育て支援施設だ。子どもたちはおもちゃで自由に遊び、母親たちは会話を楽しみ、情報交換をすることができる。

運営するのは、東日本大震災後に発足した「特定非営利活動法人ベビースマイル石巻」。これまで、0〜5歳の子どもを連れた母親たちの交流の機会をつくろうと、貸し施設を利用しながら「子育てひろば」や「ママカフェ」などを開いてきた。「スマイル」は念願の常設拠点だ。常勤スタッフ1人、非常勤スタッフ6人とその他有償ボランティアによって運営されていて、スタッフが常駐して子どもたちに目を配る。親がリラックスして落ち着ける居場所であり、困ったときの駆け込み寺としての機能ももつ。

命をつなぐ尊さと

人間関係の希薄化

代表理事の荒木裕美さん

は、石巻市に住む三児の母。東日本大震災前は、子育て中の母親たちの居場所づくりをしていく友人がいて、子育て中で妊婦だった荒木さんもそこによく足を運んでいた。その友人が震災で犠牲になり、命のたいせつさや、子を産み育て命をつなぐことの尊さを、強く感じるようになった。

一方、震災時は、支援物資として子ども用の紙おむつなどが市に集まったが、子育て世帯がどこにいないのか把握しきれない状況下での確に支給することは難しく、母親たちが乳幼児物資の受け入れをするには、個人ではなく団体として手続きをしなければならぬこともあった。集団で



ママ友や赤ちゃん、育児経験者のスタッフが集まって過ごすことで、我が子の成長を広い視野で見守れる



特定非営利活動法人 ベビースマイル石巻 代表理事 荒木 裕美さん

「この地域をたいせつにするために、
オール石巻で取り組んでいきたい」

声を上げることの必要性を学んだ。

さらに、震災によって地域の様子が大きく変わり、悩みや負担を分かち合えるはずの母親同士のつながりが薄れていることも気がかりだった。何をすることも、まずは落ち着いた環境が必要だと考えた。地域のために自分ができることを模索していた荒木さんは、「場所さえ設ければ、人が集まり、関係性をつくりなおすことができるのではないか」と考え、11年5月に任意団体「ベビースマイル石巻」の発足に至る。

母親たちが憩う

11年6月から生活協同組合の建物などを借りて、初めは月に1〜2回、多い月には8回集まる場を設けた。母親たちに参加を呼びかけたところ、初回は6組だった参加者も30組に増えた。交流しながら自由に過ごしてもらうなかで、「こういう場所がほしいと思っていた」「みんなの顔を見ると安心する」という声が聞かれた。避難所で寝泊ま

りしている人も参加し、徐々に母親たちが憩う場となっていった。翌年4月にNPO法人化した。クリスマス会など、季節に合わせたイベントも開催。ホームページでの広報のほか、口コミの効果も大きく、多いときには親子100組ほどが集まり、隣接する女川町や東松島市からの参加もあった。



念願かなって開設された常設拠点「スマイル」

も参加しやすいプログラムにし、好評を得た。

「こんなまちにしたい」

「ベビースマイル石巻」では平常時だけでなく、有事の際にも支え合うためのつながりを維持しようと、イベント参加の有無にかかわらず、メーリングリストの登録継続を勧めている。メールで催しの告知や情報提供を行っており、現在800人以上が登録。当時2歳だった幼児は、小学生に成長した。「初めは皆1人だけど、交流し始めればネットワークができて、自分の力で地域とつながっていく。それを応援したい」と荒木さんは話す。

活動を重ねるなかで、地元医師など、子育てに関心のある多職種の人たちと自然に連携がとれるようになった。ネットワークが広がるにつれて、母親目線だけでなく総合的にものごとを考えられるようになり、子育てに奮闘する人たちの「こんなまちにしたい」という思いを、行政や地元伝えることが重要だと感じている。市への事業報告や、子ども

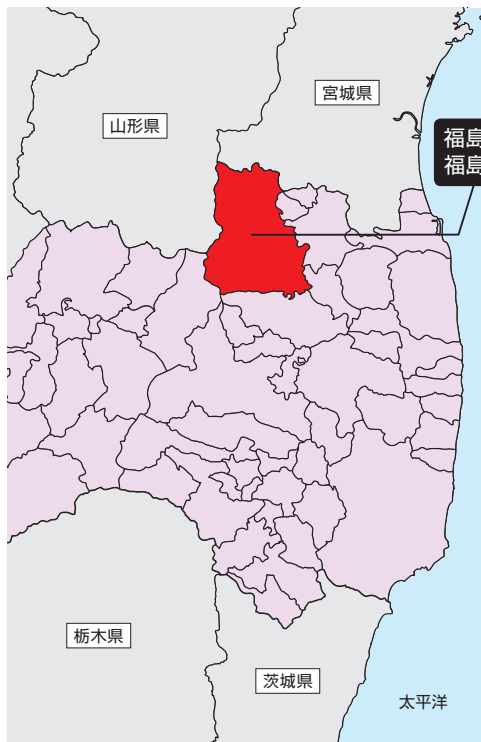
子育てに関する会議への参加をとおして、地域の子どもと親の状況や住民が求めているものを伝えるべく努めている。たいせつな地域の力として、市の職員からも荒木さんたちの背中を押ししてくれる。

自分たちの生活だけでなく、地域をどのように変えていくか。地域の課題と向き合い、行政のパートナーとしてまちづくりに取り組みたい、と荒木さんは瞳を輝かせる。「子どもたちが育つて、また子どもを産み育てていくこの地域をたいせつにするために、オール石巻で取り組んでいきたい」。清

DATA

特定非営利活動法人ベビースマイル石巻

〒986-0863 宮城県石巻市向陽町2丁目4-7
TEL 0225-24-8304 FAX 0225-24-8305
E-mail ishinomaki@forbabysmile.com
URL http://www.forbabysmile.com/



子ども高齢者も安心して楽しく過ごすことができる

乳幼児から高齢者まで誰でも参加できるサロン

◎方木田たすけあいの会・ふらーっと茶の間（福島県福島市）

ポイント

●お世話する人・される人の関係をつくらない。移動販売車で買いものの機会も確保。

認知症の人も和やかに

縁がわのある和室の広間に柔らかな冬の陽光が差し込み、高齢者や幼い子どもたちの楽しげなおしゃべりを温かく包む。

福島市方木田地区の一軒家で毎週月・木曜に開かれるサロン「ふらーっと茶の間」を1月28日、取材した。サロンは乳幼児から高齢者まで、障害のあるなしを問わず誰でも参加できる。午前10時から午後3時までの間、出入り自由だ。

玄関の鍵を開ける当番が9時半頃来て、湯沸かしなどの準備を始める。まもなく参加者も集まり、準備を手伝う。この日は70〜90歳代の高齢者と、ともに2歳の子どもを連れた若い母親2人、それに当番を含め計22人が集まった。ほとんどの人が周辺の住宅街から徒歩や自転車である。

世話役と参加者とは、ちよっと見ただけでは区別がつかない。また、参加者のなかには認知症の人もあるという。誰がそうなのか、こちらも見分けて判別できない。皆同じように準備や

片付けを手伝い、会話を楽しんでいる。

「参加者には、自分でできることはしてもらっています。お世話する人・される人の関係をつくりたくないんです」と代表の武田美恵子さん（71歳）。このほか、「仲良しグループはつくらない」「プライバシーは聞き出さない」「その場にならない人の話はしない」などいくつかの決まりごとを設けている。

「サロンがあつてよかった」

10時少し前、移動販売車が敷地内に停まる。サロンに集まった人たちが、生鮮品や総菜・弁当、菓子類、



代表の武田美恵子さん

日用品などを買い求める。11時半を過ぎるころ、近くの知的障害者通所施設からパンの出張販売もやって来る（毎週木曜）。

近隣に食料品店はなく、自動車などの移動手段を持たない人にとって、サロンは気軽に買えるものができる貴重な場でもある。そのうえ、「自分の目で見て買えます」（武田さん）。

常連参加者の一人、浪江町出身の女性（85歳）は、「このサロンがあつて本当によかった」と喜ぶ。原発避難者として近くのアパートに息子夫婦と暮らしている。隣近所に気軽にお茶飲みをするような友人はいないという。「ここでお茶飲み仲間ができたの。家の外で楽しい時間を過ごせる場所があるといいね。家にもっていたらぼけちゃうでしょ」と笑顔を見せた。

子育て中の母親（30歳）

は、結婚に伴い市外から転居してきた。2歳になる娘が7か月の頃から、子連れでサロンに通う。「私も娘も、ここで友だちをつくることができた。ここに来る

おばあちゃんたちからは、離乳食とか子育てのことをいろいろ教えてもらえる」と語る。

「ふらーっと」の名称には、誰もが気軽に立ち寄り、上下のないフラットなつながりをつくれるようにとの思いが込められている。その名のとおり、世代を越えた触れ合いと支え合いを育む場になっている。 **木**

DATA

方木田たすけあいの会・ふらーっと茶の間

高齢者の家事援助、外出支援、庭木^{せんてい}剪定、話し相手などを地域住民の有償ボランティアで行う「たすけあいの会」を、2006年4月設立、アパートの一室にサロン「ふらーっと茶の間」を開設。08年に一軒家に移転し現在に至る。子育て支援センターや知的障害者通所施設との交流や、原発避難者支援（サロン運営など）にも取り組む。運営費はバザー、会員からの年会費（2000円）、サロン参加費（1回300円）、寄付、補助・助成金でまかなう。所在地：福島市方木田字白家 35-11。電話024-545-7174。

東日本大震災
の私の地域の元気興し

支え合い

S-1
グランプリ
第3回いがす大賞
が開催されました!



被災地などで行われている住民同士の支え合い活動をたたえあう「S(支え合い)-1 グランプリ 第3回いがす大賞」が、2016年2月20日（土）にエル・パーク仙台にて開催された（主催：同実行委員会）。約200人の来場があり、予選を通過した15団体がユニークな発表で会場を熱気に包んだ。審査により「大賞」「準大賞」「活動提案賞」が決まったほか、急遽「奨励賞」も設けられた。

大賞
準大賞
活動提案賞
奨励賞

- ◆冬の華わらびの会（岩手県陸前高田市）
- ◆ラジオ体操&歩こう会（福島県郡山市）
- ◆第三地区サロンきじま（山形県山形市）
- ◆特定非営利活動法人ベビースマイル石巻（宮城県石巻市）

次号から受賞団体の活動をシリーズでご紹介します。

海が見える一軒家に

牡鹿半島に暮らす人たちが集う

「ここだどみんなに会えるし

運動にもなるからね」

お手製の漬けものをほめあったり

通っていた小学校のこと

浜での仕事や苦労ばなし

おしゃべりは尽きない

くたびれたらお昼寝をして

散歩に出る人もいれば

カルタ取りをするグループも

午後3時

なごりおしそうに送迎の車へ

あいさつは

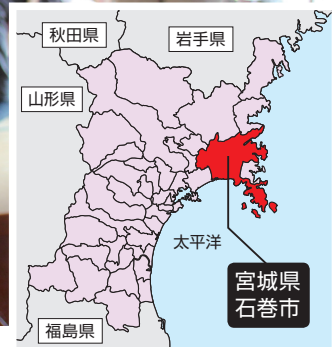
「んで、まだね」



庭の先に海が見える



体操もにぎやかに



DATA
「おらほの家」開所日

第2、4の火曜・土曜
※手芸の会 第1、3火曜

【問い合わせ】

一般社団法人キャンナス東北
石巻市塩富町2-5-5
TEL 0225-25-4802



ひとつの空間でそれぞれの楽しみを



畑の野菜は昼食のおかず



この日の午後はケーキ作りに挑戦

宮城県石巻市◎おらほの家

軽い足取りの人も介助が必要な人も、居間に入るなり持参した漬けものなどを広げてお茶飲みを始める。参加者は牡鹿半島に暮らす高齢の人たち。開催は月4回だが、参加者が増えたため、2グループに分けて各グループ月2回集まっている。

お茶飲みだけでなく、畑仕事や体操、編みものをする人もいれば、台所を手伝う人もいる。昼食づくりは料理長と呼ばれるボランティアの大壁良樹さん主導で行う。おいしい昼食に舌鼓を打ちながらも、おしゃべりは途切れない。

「おらほの家」は、全国訪問ボランティアアナサの会「キャンナス」が、2011年7月に設立した「キャンナス東北」が運営している。清水田浜に建つ一軒家は、「震災後、内陸部で暮らす方々にとって、窓の外に海が見えることが心地良いようです」とスタッフはいう。

牡鹿半島では自家用車がないと出かけるのも一苦勞。スタッフの送迎によって、別々の浜に住む仲間と集える時間は貴重だ。自分らしく生き生きと過ごすというのは、誰かと一緒だからこそ感じられることなのかもしれない。にぎやかな話し声と、大きな笑い声は庭にまで響く。



若い世代と地域住民を結ぶ たまり場づくり

◎若者活動サポートセンターあおぞら（広島県広島市安佐北区）

2015年6月、緑豊かで歴史のある広島市安佐北区可部に、「若者活動サポートセンターあおぞら」の活動拠点が開設された。ここは前年の8月20日に、豪雨による大規模な土砂災害が発災した地域で、その後も通い続けてくれる学生ボランティアのためのたまり場をつくらうと、地元住民など13人が発起人となり整備。「若い力で地域を元気づけてほしい」と期待する。

若い世代と地域をつなぐ

高齢化率が29.9%の安佐北区では、発災直後から学生ボランティアが活躍し、土砂かきや生活支援を行ってきた。

災害ボランティアセンターの運営に携わった地域住民は、高齢化や治山治水の不備などの地域課題を感じる一方で、「地域力」「受援力」「歴史」「文化」などの地域の強みや誇りを再確認した。同様にまちに魅力を感じて通い続けてくれ



リノベーションされた活動拠点

る学生たちを見て、若者が集える場所を安佐北区につくらう、ここに住み続けるために若い世代と地域をつなぐ架け橋になろう！と、地元住民が発起人となり2015年3月に発足したのが「若者活動サポートセンターあおぞら」だ。

岡山市の衣料品製造販売会社から150万円の寄付を受け、同年6月にJR可部駅に近いビルのワンフロア（約95平方メートル）を借りて、拠点を整備した。広島県内7大学の学生や若者が出入りし、地元の要請を受けた復旧活動や防災・減災の出前授業、学習支援などに取り組む。

「何かやりたい」を形にする

「あおぞら」の共同代表を務めるのは、大学で学生支援の実績をもち地域活動



増谷郁子さんと、秦野英子さん

（左）増谷郁子さん、（右）秦野英子さん

（Office 円樹代表）

と地元で子育て支援活動に長年取り組む増谷郁子さん（特定非営利活動法人子どもネットワーク可部委員長）の二人だ。それぞれの得意分野を活かして地域復興に取り組むなかで、若い世代の力が必要不可欠なことをあらためて実感。被災から半年が過ぎた2015年2月に、笑顔になろう！と学生が主催した「忘れな

い！未来に笑顔をつなげよう！復興すまいるフェスタ」には、およそ千人が来場し、手ごたえを感じた。しかし、せっかく来てくれる学生たちのたまり場が安佐北区にはなく、だんだん足が遠のき始めている様子を見て、復興活動を通じて知り合った学生たちをサポートするため、地域の関係機関に協力を仰ぎ、拠点の開設にこぎつけた。

あおぞらの開所式には、学生ボランティアなど約50人が出席。被災した住民宅をまわって悩みを聞いた、支援物資を渡したり、まち歩きイベントを開催したりするなど、今後の活動について意見を出し合った。「あくまで若者が主体。ここで互いの思いを語り合い、情報を共有し、何かやりたい・やってみようという気持ちを實現するサポートに徹しています」と二人

は話す。
 拠点としたのは古いビルのワンフロアのため、建築系の学生たちが手づくりで室内を改修することにしたのだが、設計図を描いたものの大工仕事は苦手な学生が多く、地元住民の応援によって半年後の12月に完成した。やさしい色彩でくつろげる空間に生まれ変わり、制作に苦戦した可動式の壁もある。その後もみ

んなの意見をもとに、思いを書き込める黒板をつけたり、災害に関する図書館をつくりたいからと本棚が設置されるなど、着々と模様替えが進む。
バックアップしてくれる存在
 「あおぞら」には、学生の団体や個人、卒業生も子連れで出入りしている。



思いを語りつなげるワークショップ

安佐北区の被災した人たちにほっこりする時間を提供したいと大学生たちが始めた「にじカフェ」は、休日の古民家レストランを借りて、毎月第4土曜日に開催している。カフェで働いた経験のないメンバーばかりだが、コーヒーの淹れ方やお菓子の作り方を学びながら、自分たちが楽しみな地域でできることを模索する。「カフェに来て、住民同士が知り合うことが、ひいては防災につながるのではと思う」「次の支援は心のケアではないかと考えるようになった」という学生たちの言葉が頼もしい。前回のカフェの反省や次回の運営について、あ



学生が思いを綴る黒板

おぞらでミーティングを開く。活動が学業に支障をきたさないように、「あおぞら」がにじカフェの事務局も担う。

東日本大震災をきっかけに、6つの大学の学生たちによって生まれた防災・減災を考える団体「HUGI-YOU」も、あおぞらが事務局を担う。「復興支援活動を通じてお世話になった住民の方々に恩返しをした」と話し、子ども向けの防災講座や安佐北区でのまち歩き研修会を企画する。

学生たちは、「あおぞらのお母さん役」の秦野さん、料理のおいしい増谷さんと二人を慕う。「そつとヒントをくれたり、バック



土砂災害からの復興活動も継続

アップしてくれる心強い存在」だとも。やる気を形にするには時間がかかる、そんなときも急かさず待ってくれる二人への信頼は厚い。

あおぞらの目標は、「安佐北区のファンを増やすこと」。「災害と日常は隣り合わせ。安佐北区がもつ豊かな自然や伝統を継承しながら、地域住民と若い世代が支え合うことで、より住みやすいまちになっていくことを願っています」と話す秦野さんと増谷さん。多様な被災地に活かせるヒントの詰まった実践といえる。**小**

DATA

若者活動サポートセンターあおぞら

OPEN 月～木曜日 10:30～17:00
 土曜日 10:00～18:00

〒731-0221
 広島県広島市安佐北区可部4-10-8 石田ビル201
 TEL&FAX 082-562-2451
 Facebook <https://www.facebook.com/aozorawakamono/>
 E-mail aozora.wakamono@gmail.com
 Blog <http://aozorawakamono.exblog.jp/>

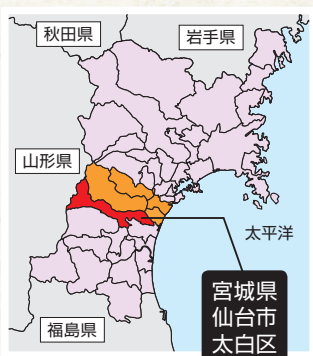


冬のラジオ体操に 集会室活用 体操後にお茶会も

あすと長町復興公営住宅
(宮城県仙台市太白区)



あすと長町復興公営住宅の1階集会室でのラジオ体操。
地域住民も参加する



まじわる!
災害公営住宅
第12回

本紙37号(2015年9月20日発行)で紹介した、あすと長町中央公園(仙台市太白区)での災害公営住宅入居者や地域住民らによる朝6時半からのラジオ体操活動は、現在も毎日20〜30人が参加し、継続している。

寒さが厳しく、日の出も遅い12〜3月、体操会場は、同公園から近隣のあすと長町復興公営住宅(Ⅱ災害公営住宅、13階建て163戸)の集会室に移された。

集会室の利用は、体操の呼びかけ人で同住宅に暮らす北村敏子さん(74歳)が、同住宅自治会の準備組織「世話人代表者会」に提案、了承されたもの。自治会設立まで集会所を管理する区役所も快諾した。

集会室でのラジオ体操活動は、これ以前にも雨天時に限って認められていた。

集会室での冬の体操会が始まって2週間ほど経った昨年12月13日、初めて体操に続いてお茶会



昨年12月13日、体操のあとにお茶会が開かれた



体操後のお茶会を企画した入居者(左から大山葉子さん、大友寛一さん、北村敏子さん)

が開かれ、21人が参加した。まずNHKラジオ第一放送のラジオ体操に合わせ10分間体を動かし、続いて全員で物置から

テーブルやイスを出して並べるなどの準備作業を行った。その後、お茶やお菓子、手づくりの冬至かぼちゃなどが振る舞われた。早朝の住民交流を楽しんだ参加者は、口々に「たまにはみんなでお茶飲みするのもいい」などと話し、今回の取り組みを喜んだ。お茶会の企画から食材の手配、調理

などは、北村さんをはじめ世話人代表者会の副代表・大山葉子さん(68歳)や、世話人の大友寛一さん(82歳)ら入居者が担当した。

また、今回は仙台市ラジオ体操連盟から山崎道隆理事長ら役員が駆けつけ、体操の指導を行ったほか、「ラジオ体操スタンブカード」を配ったり、お茶菓子を差し入れるなどした。山崎理事長は、「住民交流と健康づくりがセットになったこの体操会は、ラジオ体操の理想的なあり方。とても素晴らしい」と高く評価した。

北村さんは、「毎朝体操していると体の調子がいい。地域の人たちと知り合えるのも楽しみ。ずっと続けたい。お茶会も、また開けるといいですね」と期待を語った。

山崎理事長によると、同日時点で市内49か所でラジオ体操会が開かれており、愛好者人口は3000人を超える。ラジオ体操をきっかけに、地域づくりの輪も広がってほしい。**木**

認知症になっても、 できることを発揮できる社会に

宮城県仙台市◎おれんじドア代表 丹野 智文さん



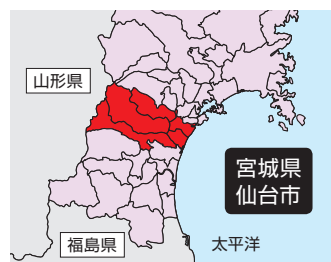
自動車販売店で働く丹野智文さんは2013年、39歳のときに若年性アルツハイマー型認知症と診断された。同じ病気の人たちの力になりたいと、2015年5月、認知症のある人の悩みに当事者が応じる相談窓口「おれんじドア」を開設。毎月第4土曜日の14～16時に、相談者が東北福祉大学のカフェに集う。

認知症当事者

認知症になると、みんな自信をなくしてしまっ、「何もできなくなるのではないか」と悩みます。できないことが増えても、まだまだできることもありま。家族は、良かれと思っ当事者の身の回りのお世話をすべてしがちですが、まだ本人ができることは一緒にやってほしいと思います。

また、当事者が声をあげないと、周りの人は本人が何に困っているのかわかりません。困っている人を必要な機能などにつなぐシステム、助けてほしいことを伝えられる環境がもっと広がってほしいですね。地域生活においても、本人のできない部分は周りの人が支えるという視点が大事だと思います。

「おれんじドア」は、認知症



おれんじドアのスタッフミーティング

をもって前向きに生きる当事者に出会ったことがきっかけとなり、自分もほかの認知症当事者のためにできることをしたいと考えて始めました。私自身は、参加者の相談にのるというよりも、笑って接することで「認知症になっても、こうやって笑って生活できるんだ」と感じてもらいたいと思っています。当事者同士で話をする、笑顔を見せてくれる人がたくさんいます。まずご本人に元気になっていただき、それによってご家族にも元気になってもらいたい。不安から脱出する一歩を、頑張って踏み出せる場になればと思います。継続して場を設けることはたいせつですが、「来てみたいと思ったらどうぞ」というくらいに敷居を低く、ゆるくやっていきたいですね。(談)

おれんじドア事務局

TEL 070-5477-0718
(平日 10時～15時)

ママ目線で、子どもを災害から守る！

宮城県仙台市◎防災士

佐藤 美嶺さん

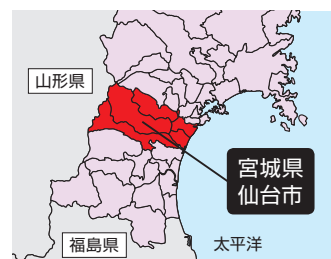


東日本大震災のとき、第1子を出産したばかりだった佐藤美嶺さん。さまざまな不安を感じた経験から、必要な人に必要な情報を提供したいと、2012年12月に防災士の資格を取得。宮城県内の乳幼児親子を中心に、防災・減災に関する講座やワークショップの講師として、防災・減災意識の普及に努めている。

ママ防災士

被災経験があつても、家族構成や住環境が変わると、災害時に必要な備えは違ってきます。震災後にママになった人が増え、子どもを災害から守りたくてもどうすればいいのかわからない、という声も聞きます。物が手に入らないときに、おむつや離乳食はどうすればよいのか？ 子どもを抱えながら被災するというイメージを共有し、日頃からできる備えを一緒に考えることができればと思います、活動しています。

防災・減災は、特別なことではなく、日常の延長にあります。たとえば1週間分の食料を無駄なく備蓄するためには、普段食べているものを少し多めにストックし、なくなる前に買足す方法が有効です。特別な非常食を1週間分保管するのは、お金も場所も必要です。いつも食べている米や乾麺、



缶詰、パスタソースやカレーなどのレトルト食品を多めに備蓄する方法は、家事を少し手抜きしつつ、立派な備蓄になる、主婦にとつて「石二鳥の方法といえます」(笑)。

防災士の講習会で、避難所運営のグループワークをした際、「授乳室がほしい」と発言したら、まわりの男性から「なぜ？」と聞かれました。「必要だ」と発言しなければ気づいてもらえない、と思つたことが、活動の原動力になっています。子どもたち自身が災害から身を守るための防災ゲーム「だるまさんが地震」も考えました。人任せにせず、自分の命を自分で守る行動を身につけてほしいと思つたからです。母として日々の暮らしに追われがちですが、ちょっとしたことから『備え』を実践できるきっかけを提供できたらと思つています。(談)

ママの立場で考える
防災・減災

<https://sites.google.com/site/bousaisatomine/>

宮城県サポートセンター支援事務所からのお知らせ



サポートセンター行脚

宮城県サポートセンター支援事務所 所長 鈴木守幸

『面倒くさい人』の話

この一年、私の口癖が目立って多かったのが『面倒くさい』でした。生来の無精者なのか、面倒な相談には及び腰。地域包括支援センターからの困難事例などは、『困難だ』と言っている支援する側の問題であり、面倒なことの極み(?)と感じてしまいます。

『面倒くさい』には、実は使い分けがあります。福祉系や相談対応を仕事とする皆さんのなかは、『面倒くさい』のが取り柄のような方々が多くいます。なので、無精者としても礼を尽くした対応をせざるを得ない場合が多いです。相手が一生懸命さや誠実さを語ると、何よりも自らの支援法についての想いを熱く語られると困ります。面倒くさいけど、仕方ないか…、これはよくあるパターンです。俺なんか、スーパーバイズができる柄でもないのに。紙面の真横の執筆者に「丸投げ」したいのが本音です。だけど例外もあって、地域を支えるために、面倒なことに首を突っ込んでお節介を焼いている方々には「恐れ多くて」言えません。

一方で、『面倒くさい!!』と切り捨てるような想いも抱く機会も多い一年でした。協議のなかで、自分の言葉で話さず、組織を逃げ道にする方々とは、話になりません。協議は協働するために行うものであり、黙っているだけでは何も進みません。寡黙で人にメッセージを伝えることのできるの、私を知る限り、俳優の高倉健さんだけです。

復興に向けて動くなか、組織を超え、制度を超え、職種も超えた、各市町単位のプラットホームの協議の場を意識させられたこの一年でした。当支援事務所のコーディネーターは、私と違ってファシリテートに長けた女性です。凛とした佇まいは、多くの市町で協議の場をつくり、関係機関と協働する取り組みを支えています。今年は、彼女の素敵な後姿を少し模していくつもり…多分、無理! 面倒くさい!!

ひとりごと

サポーターのあなたへ



宮城県サポートセンター支援事務所
アドバイザー 浜上章

人の意識に働きかける “地域福祉活動”は魅力的!

前号で、“地域福祉活動は人の意識に働きかける活動”ということに触れました。人の意識は簡単には変わりません。だから、地域福祉活動が難しいのも事実です。では、すぐに諦めるのか? いやいや、諦めたらコミュニティワーカーの仕事になりません。

かつて私の尊敬した兵庫県社協の先輩の口癖に、『地域福祉はロマンだ!』と。また、ある町社協の敬愛する先輩は、『地域福祉は愛だ!』と。また、大阪府社協の先輩は『地域福祉は戦略だ!』という名言を言われました。

私は、こうした先輩方の名言に感動で心が震えます。そこには、貴高い夢と深遠で本質的な理想と現実的な視点があります。簡単には実現できないものです。難しくても当然です。だからこそ諦めないで、根気よく求め続ける価値のあるものが地域福祉であると思います。

住民や地域が主体の地域福祉活動を始める時、あるいは何らかの組織をつくる時、関係する住民自身にその活動や組織についての関心と十分な理解、思いがなくてはできません。たとえ、関心や思いがあっても、自分たちから始めよう、つくろう、という人は少ないのが実情です。

地域福祉活動を働きかけていくコミュニティワーカー、地域福祉コーディネーターと言われる専門職は、多くの場合、意識づくりや思いを寄せ集めるところからスタートします。

地域福祉活動をを進めるためには、関わる住民や団体、組織等の合意形成が不可欠です。目的や目標、そして進め方、思いを十分に共有する、了解や、納得を得るなど、意識を一つにすることが求められます。手間も時間もかかります。こここのところ手を抜くとうまいかないですが、乗り越えたと、あとは順調にいくことも多いのです。だから、地域福祉活動は難しいとも言えますし、面白いとも言えます。そして、ワーカーの心のなかに“夢や理想”と“熱い思い”があると、根気よく取り組めるのも事実です。

平成27年度 宮城県被災者支援従事者研修事業

<市町別事例研究会>

【石巻市会場】2月26日(金) 【青葉区会場】3月7日(月)

講師:大坂 純(仙台白百合女子大学 人間学部 教授)

池田 昌弘(全国コミュニティライフサポートセンター 理事長)

<スーパーバイザー研修>

【仙台会場】2月19日(金)

講師:平野 隆之(日本福祉大学 副学長、社会福祉学部 教授)

大坂 純(仙台白百合女子大学 人間学部 教授)

<地域福祉コーディネーター中堅研修>【仙台会場】3月14日(月)・15日(火)

講師:藤井 博志(神戸学院大学 総合リハビリテーション学部 教授)

浜上 章(宮城県サポートセンター支援事務所 アドバイザー)

浅野 恵美(美里町社会福祉協議会 地域福祉課 地域福祉係 係長)

眞籠 孝史(東松島市社会福祉協議会 東松島市くらし安心サポートセンター 主任相談支援員)

<地域支え合い実践研修>

【石巻会場】3月2日(水) 【仙台会場①】3月8日(火) 【仙台会場②】3月10日(木)

講師:池田 昌弘(全国コミュニティライフサポートセンター 理事長)

木村 利浩(全国コミュニティライフサポートセンター 企画広報・書籍販売グループ 主任)

宮城県サポートセンター支援事務所

〒980-0014 宮城県仙台市青葉区本町3-7-4 宮城県社会福祉会館3階 TEL 022-217-1617 FAX 022-217-1601



アロマクリームづくりで、リフレッシュなひととき



今回は...

東北の元気

東北の力をつくりだす人・団体を紹介します。

吉里吉里を、子育てママの住みやすいまちに!

◎ままりば (岩手県大槌町)

ライター: 元持幸子

「ままりば」とは、「ママのたまり場」と英語の「liberty(自由)」を重ね合わせた小川さんの造語。サロンでは、心身ともにリラックスしたいママたちの思いを叶えるため、フラワーアレンジメントや料理、エステやネイル講座などを企画する。毎日頑張っているママたちへの小さなご褒

美でおいしいお茶とゆっくりした時間を過ごし、ママが笑顔になっていく地域サロン「ままりば」は、2014年12月20日、大槌町吉里吉里駅前広場に設置された。代表の小川麻里子さん(37歳)は、震災のなか3人目の子どもを無事に出産し、言葉にできないほどの喜びを感じた。しかし、被災後の町で子どもを元気に育てられるかという不安も同時に抱えていた。「子どもを一人で見ないで、みんなで見れば良いじゃないか!」と思いついた小川さんは、ママや子どもたちの集まる場所として、プレハブを活用したサロン「ままりば」をつくった。

美であり、日々の慌ただしさから解放される数時間を提供し、ママたちに笑顔を生み出している。地域のイベント開催時には、出張託児サービスを提供するなど、地域にも出向いている。小川さんは、「吉里吉里を子育てママたちの住みやすいまちにしたい。ママが笑顔ならば、家族は安心して帰ってくる」と、サロンに来る人たちを迎え入れる。「ままりば」は、ママの自遊空間! 子育てから一時的に離れて一息つき、情報交換をして、癒される場だ。「ママが笑顔でおかえり」と言えるためのあと押しを、これからもしていくことだろう。

DATA

ままりば
〒028-1101
岩手県大槌町吉里吉里2-1-2
Email marisande@gmail.com
URL http://mamaliber.com

お知らせ ☆次号予告 特集「災害公営住宅の住民力」

平成27年度 福島県・地域支え合い体制づくり事業
＜被災者生活支援の基礎研修と災害公営住宅への転居期における研修実践編＞
【南相馬会場】3月1日(火)・2日(水) 南相馬市民情報交流センター
講師:大坂 純(仙台白百合女子大学 人間学部 教授)
山本 信也(宝塚市社会福祉協議会 地域福祉部 地区担当課 課長)
【いわき会場】3月8日(火)・9日(水) いわき市労働福祉会館
講師:大坂 純(仙台白百合女子大学 人間学部 教授)
岩城 和志(淡路市社会福祉協議会 参事
兼 地域支えあいセンターいちのみや センター長)

平成27年度 宮城県生活支援コーディネーター(地域支え合い推進員)養成研修
＜生活支援コーディネーター基礎・実践研修＞
【仙台会場①】2月22日(月)・23日(火)
宮城県庁講堂・勝山公園カンファレンスルーム
【仙台会場②】3月14日(月)・15日(火) 宮城県自治会館
講師:高橋 誠一(東北福祉大学 総合福祉学部 教授)
大坂 純(仙台白百合女子大学 人間学部 教授)
志水 田鶴子(仙台白百合女子大学 人間学部 准教授)ほか

購読者を募集しています!
「月刊 地域支え合い情報」を年間購読しませんか?
購読会員 年3,696円(年12回、送料込み)
購読ご希望の方は下記口座へお振り込みください。編集部にて確認次第、情報紙を発送いたします。
◎お振込先 ●ゆうちょ銀行振替口座
口座番号: 02260-9-46303
加入者名: 全国コミュニティライフサポートセンター
※通信欄に、「地域支え合い情報紙 購読費」と記入したうえで、
①お届け先の住所 と ②何号からの購読申込み
を記入してください。

あなたの活動・地域の活動情報をお寄せください!
TEL 022-727-8730 FAX 022-727-8737
E-mail joh@clc-japan.com

編集後記
「S-1グランプリ」第3回いがす大賞の結果報告を掲載しました。出場団体の中には、すでに本紙で活動を紹介させていただいた方々もいらっしゃいますので、改めてバックナンバーを要チェックです。そして、「第4回いがす大賞」開催の際には、ぜひ読者の皆さんも奮ってご参加ください。(清野)